

PHOTO 重田琢也

生研 ニュース

IIS NEWS
No.128
2011.2



●事務部長
佐沼 繁治

IIS
TODAY

今回、表紙に登場していただいたのは、本所の佐沼繁治事務部長です。佐沼さんは総勢約100名で構成される本所の事務部門の総まとめ役として、大小様々な案件について本所の活動を支えて下さっています。佐沼さんは、これまでに本学を中心に旧東京教育大学や国立極地研究所を含む約10部署の事務部門の異動を経験されてきた、まさに「事務業務のプロ」です。

本所の特徴をお伺いしたところ、「事務部門と教員の連携が密である点」と「企業との連携が盛んであ

る点」の2点を挙げられました。本所は企業との連携が盛んなため、事務手続き的には前例のない新たな枠組みを作る必要があり事務業務としてはご苦労も多いのではないかと推察します。しかし、インタビューで最も強調されていたのは、「事務職員は教員の研究活動を支えるために、先生方の懐へ飛び込むのが重要だ」という点です。私個人としても、本所の事務の方々には日々、心地よく対応して頂いていると感じていますが、佐沼さんのこのスローガンがその一因なのであろうと納得しました。（高宮 真）

ツァヒヤール・エルベグドルジ モンゴル国大統領、安田講堂にて講演

11月16日(火)、ツァヒヤール・エルベグドルジモンゴル国大統領が本学を訪問され、本所主催の講演会が安田講堂において開催された。演題は「開発と自然環境」で、約30分間に渡り、モンゴル国の環境および資源開発に関して講演が行われた。

安田講堂の一階部分が満席となる約700名を超える参加者が集まり、耳目を傾けた。

モンゴル国は、遊牧民が自由に渡り歩く移動牧畜がよく知られる。その生活スタイルは、現在の地球環境の変化を著しく感じやすい。いまでは都市環境が整備され、その様式もだいぶ様変わりしたようである。人口が約250万人であるのに対し、家畜数が約3000万といった棲息個体割合なども特徴的で、草食家畜用のバイオ緑化整備も急務となっている。また、いま話題のレアアースなどの資源開発において、世界的に注目を集める国のひとつとなっている。合金鋼成分であるモリブデンや石炭の開発が推進されている。

今回、大統領の主な来日目的は、日本との「戦略的パートナーシップ」締結、

および日本政府との関係強化である。講演では、日本をロシア、中国に次ぐ第三の重要な隣国として位置づけ、積極的な投資と資源開発／鉱山探索の協調を呼びかけられた。講演中、「もう既に目覚ましのベルが鳴っている」といった独特の表現で、特に日本企業からのモンゴル国来訪を期待しているとのことであった。演題にもあるように開発と環境保全の両立を目指さねばならないと強調され、そのための日本からの協力、両国の戦略的互惠関係の構築を目指したいと語られた。

講演終了後、質疑応答が行われ「東京大学の学生との対話を楽しみにして来た。」と仰られた通り、聴講学生からの質問に予定時間を過ぎても大統領自ら指名し質問をお受けになられていた。

質疑応答終了後、濱田純一総長より、記念品贈呈が行われ、盛会のうちに終了した。

モンゴル国と言え

ば、モンゴル相撲。引退した朝青龍関、そして大統領来日まで連続勝ち星の記録を打ち立てていた白鵬関など。それに青い空、広大な緑の大地である。地球規模で広がる環境問題に国境は無く、振り返り見れば地球上の資源には限りがあるが、生活の知恵を共有し自然を享受することに関して学ぶべきところの多い隣人の話には最後まで興味が尽きなかった。この場をお借りして、警備や事前準備に当たられた多くの事務職員の方々に御礼を申し上げたい。

(広報委員会 小倉 賢)



講演を行うツァヒヤール・エルベグドルジ
モンゴル国大統領



講演会会場の様子(安田講堂内)





生研記者会見報告

12月16日記者会見

「ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構」
「フォトニック人工原子からのレーザー光」の論文発表で会見

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
荒川 泰彦 機構長 発表
岩本 敏 准教授
Aniwat Tandaechanurat 特任助教

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構(機構長=荒川泰彦本所教授)は12月16日(木)、本所会議室で記者会見を開き、荒川教授、Aniwat Tandaechanurat

特任助教らが開発した「フォトニック人工原子からのレーザー光」について報道発表を行いました。3Dフォトニック結晶ナノ共振器に埋め込んだ量子ドットからの

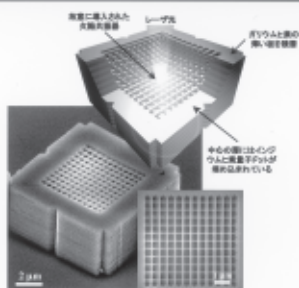
レーザー発振は世界初の成果で、電子も光子も3Dに閉じ込める究極のフォトニック人工原子レーザーを実現しました。最適設計により、また高品質量子ドットを埋め込むことで、光閉じ込め性能を示すQ値を3Dフォトニック結晶では最高の約40,000に向上することが可能となりました。

量子ドットは、原子核に電子が束縛される原子になぞらえ、人工原子と呼ばれます。3Dフォトニック結晶ナノ共振器は、その波長レベルの狭い空間に光子を閉じ込めてレーザー発振制御ができることから、「フォトニック人工原子」と表現できます。今回、その究極のレーザー発振に成功したもので、将来、無閾値レーザーをはじめ、次世代の光集積回路の高効率光源、量子暗号通信や量子コンピュータなどの光源としての実現が期待されます。

この成果は、12月19日(英国時間)付 Nature Photonics 電子版に先行公開され、日本経済新聞など多くの媒体に取り上げられ、反響を呼びました。

(ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 特任研究員 男澤 宏也)

フォトニック人工原子レーザー



フォトニック人工原子レーザーの概念図(上)および電子顕微鏡写真(中央=全体像、右下=上から見た平面像)



フォトニック人工原子レーザーの概念図(上)および電子顕微鏡(中央=全体像、右下=上から見た平面像)



奨励会顕彰受賞にあたって

この度はこのような賞を頂き、大変光栄に存じます。私は、これまでモンスーン域における乾季から雨季への季節進行について研究を進めてまいりました。一般的にモンスーンの開始は急激ですが、地域によっては徐々に乾季から雨季へ移行します。これは世界有数の米作地帯かつ大河川の流域であるインド亜大陸北東部でも見られ、この地域の水循環に大きく影響を与えることが考えられます。私は三好研究助成金を受け、

2009年夏季にインド亜大陸北東部にあ
る水文気象の研究・現業機関に滞在し、
主として遷移期の降水現象に関わる情
報・データを収集するとともに、インド・
バングラデシュの研究者や現業担当者
との意見交換を行いました。本調査研
究により、リモートセンシング技術で得
られるデータに高時間分解能観測デー
タを加えることにより詳細な解析を進め
ることができ、さらに国際研究プロジェ
クト「STORM」に関する情報収集や意

見交換を行い、プロジェクトへの参画と
データの共有をなし得たことで、研究の
推進だけでなく今後の研究活動を幅広
いものとすることができました。

最後に、これまで研究活動を支えて
頂いた沖大幹教授をはじめ多くの皆様
に深く感謝申し上げます。

(人間・社会系部門 沖研究室
木口 雅司)



バンコクにて、第4回タイ生研同窓会および環境・防災シンポジウムが開催される

11月27日（土）、バンコクのパトムワンプリンセスホテルにて、第4回タイ生研同窓会と記念学術シンポジウム「東南アジアにおける環境・防災分野における地理空間情報技術の最前線と挑戦」が開催された。

タイ生研同窓会には、バンコク支部代表のスーヴィット博士をはじめ、タイの政府機関や大学、企業で活躍する本所同窓生が集結した。本所からは目黒教授、竹内（渉）准教授、川崎特任准教授およびOBの安岡善文国立環境研

究所理事が参加した。参加者全員が一言ずつ本所の思い出と近況を語るなど、和やかな雰囲気に満ちた素晴らしい会合であった。

同窓会の前に同じ会場で開催された記念学術シンポジウムは、本所アジア拠点のチュラロンコン大学チュラユニサーチの生研分室、アジア工科大学院（AIT）のICUSアジア拠点オフィスおよび本所同窓会の共催によるものである。4人のタイ研究者と上述の本所教員、さらにJAXAおよびJSPSのバンコク事務所が

発表を行ったが、予定の会場を変更せざるを得ないほどの参加者（約140名）があり、タイ側の当該分野への関心の高さを感じた。

今後ともタイ同窓生との交流を促進すべく、2011年の同窓会は10月15日に開催予定である。この時期にバンコクにご滞在の予定があれば、ぜひ本同窓会にご参加いただきたい。

（都市基盤安全工学国際研究センター
川崎 昭如・目黒 公郎）



同窓会での乾杯の様子



安岡善文国立環境研究所理事による挨拶



懇談の様子



参加者一同による集合写真



スーヴィット博士（生研同窓会バンコク支部代表）による講演



学術シンポジウムの参加者

千葉実験所公開が行われました。

11月12日（金）に本所千葉実験所公開が開催されました。例年通り、今年も千葉実験所の特徴である大規模実験施設を中心とした29研究室・研究センターによる23研究テーマの一般公開と特別講演、デモンストレーションが行われました。今回は本学の前田理事（本所前所長）にもお越しいただきました。

今回の特別企画は、エネルギー工学連携研究センター堤研の「次世代高効率ガス化発電システムの開発」について行われ、堤敦司教授による「エクセル

ギー再生ガス化の原理」・伏見千尋助教による「大型循環流動層装置の粒子流動特性」の特別講演に引き続き、「次世代石炭ガス化炉試験装置完成式」が行われました。経済産業省資源エネルギー庁、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、石炭エネルギーセンター（JCOAL）など多方面から多数のご来賓をお迎えし、たいへん盛況でした。

来場者数は前年を上回る750人で、恒例となっている近隣の小学校を対象とした見学会も行われ、弥生小学校、

轟町小学校の生徒が訪れ展示場を巡回しました。林研他的大型水槽を使った水中ロボットのデモや、須田研のエコライド体験、川口研のテンセグリティ構造のデモなど盛り沢山の楽しい見学会で、大いに賑わっておりました。

毎年多くの方にご来場いただき、公開イベントはますます活気を帯びています。また、公開にあわせて生研同窓会パーティーも華やかに開催されました。

（千葉実験所管理運営委員会

梅野 宜崇、瀬戸 心太）



REPORTS

同窓会パーティー



本所同窓会韓国支部総会が韓国ソウルで開催される

12月4日（土）に本所同窓会韓国支部総会が韓国ソウルのプレジデントホテル（コーラルホール18階）で開かれました。韓国支部の同窓会は2007年5月26日に李利衡青雲大学総長を会長とし、幹事2名及び発起代表者15名として創設された以来、年2回総会が開催され、今回が正確に創設約3年目の第7回であります。この第7回の記念的な日には本所総同窓会の岡田恒男会長（日本建築

防災協会理事長）も参加され、総同窓会の報告会及び「建物の耐震性能の評価及び地震対策の普及」と主題で記念講演会をしました。この講演会では会長の博士論文を始め、本所の教授の時の研究成果等、日本の耐震対策に関する貴重な内容に関して講演しました。また、韓国釜山大学建築工学科の李祥浩教授が「地震実験施設の構築と活用」と主題で韓国においての最近の耐震実

験技術の活用状況に関して発表しました。今回、韓国支部の同窓会では李利衡会長を含め、約20名の韓国支部同窓会が出席した他、東京大学赤門校友会の韓国支部の幹事である金斗煥教授（亞洲大学大学院宇宙計測情報工学科）もオブザーバとして参加され、お互いの深い親睦を図りました。

「韓国国立全南大学助教授 李康碩
（生研での滞在歴あり）」



本所同窓会韓国支部へのお誘い

本所同窓会韓国支部では、日本での研究活動を終えられて帰韓される方々の参加をお待ちしております。離日前に総務広報チーム koho@iis.u-tokyo.ac.jp まで御一報くだされば幸いです。

（同窓会幹事長 吉川 暢宏）

サステイナブル材料国際研究センターシンポジウム 「資源循環の諸問題と100年の安定に向けて」

11月29日(月)、An棟コンベンションホールにて、サステイナブル材料国際研究センターシンポジウム「資源循環の諸問題と100年の安定に向けて」が開催されました。今世紀に入り資源メジャーの再編や、投機的資金の資源への投入等が加速して、資源社会の景況が大きく変わりゆく中、このシンポジウムは循環社会構築のための提言ならびに議論を行うことを目的といたしました。最近、レアメタル・レアアースが社会的注目を浴びる中、産学官より200名を越える聴衆を集めました。

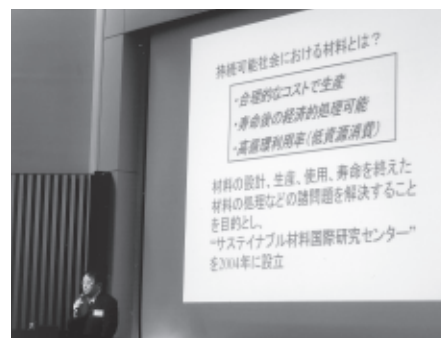
講演会は前田正史副学長の基調講

演「金属資源と我が国」に始まり、センター教員による9件の講演、本所エネルギー工学連携研究センター長の堤教授、秋田大学国際資源教育研究センター長の水田教授の招待講演が行われました。金属製造プロセスから資源社会システムの改革、さらにはエネルギー・環境戦略に至るまで、持続可能社会における資源循環のあり方を広く提唱する講演会となりました。

講演会の後には、ホワイエに場所を移し、懇親会を開きました。100名以上が参加し活発な意見交換が行われました。タイムリーなトピックであることを裏

付けるように、講演会・懇親会を通して終始熱気に包まれ、盛会のうちに終わることができました。

(サステイナブル材料国際研究センター
吉川 健)



森田一樹センター長

第19回ICUSオープンレクチャー 「建設産業の将来像～海外・環境戦略と産業構造～」

11月10日(水)午後、第19回ICUSオープンレクチャーが開催されました。都市基盤安全工学国際研究センター(ICUS)では、広く一般の方への情報発信の場として年2回のペースで講演会を開催しています。今回は、「建設産業の将来像～海外・環境戦略と産業構造～」というテーマで、3名の講師の方からお話いただきました。まず、香川大学工学系研究科の堺孝司教授が、地球環境問題の視点から、建設産業、とりわけ主要な建設材料であるコンクリートセクターの今

後の方向性として、消費資源の最少化やインフラ整備、運用、解体を通じたローカーボン化の重要性を力説されました。続いて(有)エフプランニングの千葉利宏氏より、ご自身のジャーナリスト活動を通して、建設産業の将来像について、IT産業との比較論からご紹介がありました。最後に本学工学系研究科の小澤一雅教授より、2010年4月に土木学会から提言された「インフラチームジャパンを世界へ」の内容について、その背景から具体的な取り組み事例を交えて、

今後の建設産業の世界戦略の重要性についてご説明いただきました。明るい話題の少ない建設産業において、明るい未来を創造するための重要な視点について、講師の方々から示唆に富む話題を提供していただきました。講演会の後は恒例の懇親会でさらに活発な情報交換が行われました。

(都市基盤安全工学国際研究センター
加藤 佳孝)



香川大学 堺孝司教授



東京大学 小澤一雅教授



(有) エフプランニング 千葉利宏氏

「女子中高生のみなさん 最先端の工学研究に触れてみよう！」開催

『女子中高生のみなさん 最先端の工学研究に触れてみよう!』を11月6日(土)に開催しました。当日は、女子中学生・高校生30名、保護者22名の参加がありました。このイベントは、JST「女子中高生の理系進路選択支援事業」の支援を受け、東京大学女子中高生理系進路支援「家族でナック!理系最前線II」の一環として行われました。

講演会では、本所の女性研究者である、吉江尚子先生、岩船由美子先生、松永行子先生に御自身が行っている最先端の工学研究についてお話いただきました。女子中学生・高校生にとってあまり馴染みがないと思われがちな工学研究が、実は生体や環境など私たちの

生活に密着した分野だということが分かり、みなさんとても興味深い様子で耳を傾けていました。

講演会の後には、本所的女子学生の引率で研究室を見学しました。普段は見ることのできない研究現場を目の当たりにし、更に工学研究に興味を持ったようです。また、研究室見学と並行して、保護者向けの説明会も行いました。

最後に、本所の女性教員や女子学生との交流会を行いました。初めは少し緊張していましたが、女性同士ということもありすぐに打ち解け、「理系に進んで困ったことは?」「なぜ理系に進んだのですか?」など、様々な質問が飛び交っていました。

イベント後のアンケートでは、参加者全員が「満足」「どちらかといえば満足」と回答してくださいました。また、「工学について興味がわいた」「理系に進学したいと思った」といった感想が多数寄せられました。本所で行われている最先端の工学研究を通して、女子中学生・高校生の皆さんがご家族の理解のもと、科学や技術に対する興味を深めてくれればと願っています。

最後になりましたが、御協力いただいた先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。

(機械・生体系部門 大島研究室
川越 至桜)



出張授業 埼玉県立浦和第一女子高等学校 『自走式ロボット「ちょこまカー」をつくろう』

12月18日（土）午後に、埼玉県立浦和第一女子高等学校で出張授業を行いました。SSH（スーパーサイエンスハイスクール）クラスの1年生28名が参加しました。今回の出張授業は、マイクロナノメカトロニクス国際研究センター小林大助教による『自走式ロボット「ちょこまカー」をつくろう』でした。

「ちょこまカー」は、昨年のキャンパス公開の理科教室でも大人気でした。床の上に引かれた黒線を光センサーで検出し、モーターを制御することで線の上を沿って走るロボットです。

はじめに、ちょこまカーに使用する光センサーやトランジスタについての解説

と簡単な実験を行い、それぞれの原理を学習しました。次に、光センサー、トランジスタ、モーターなどを使用して、ちょこまカーを1人1台組み立てました。はんだ付けを含む工作でしたが、生徒のほとんどがはんだ付けの経験があり、また、制作経験豊富な大学院生が丁寧に指導してくれたため、全員がきちんと走るものを完成させることができました。

授業終了時刻となってしまったため、班対抗レースはできませんでしたが、生徒たちはカレンダーの裏側などにコースを描き、制作したちょこまカーを走らせていました。

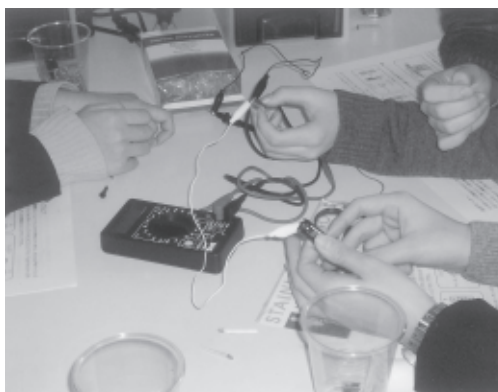
参加生徒からは、「トランジスタの仕

組みなどを詳しく知ることができてよかった」「ロボットを自分で作ることができて嬉しかった」「機械などを身近に感じられるようになった」といった感想がよせられました。今回の出張授業をきっかけとして、科学技術をより身近に感じ、興味を深めてもらえればと願っています。

最後になりましたが、今回の出張授業に御協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

（機械・生体系部門 大島研究室

川越 至桜）



第4回生研サロン開催される

11月24日（水）18時30分よりAn棟カポ・パリカーノにて、本年度第4回目の生研サロンが、暮れ行く秋の夜長に誘われて20名の教員・事務職員の参加のもと行われた。今回は、市橋康吉先生（都市基盤安全工学国際研究センター客員教授）から「外務省から見た生研」、巻俊宏先生（海中工学国際研究センター准教授）から「海中プラットフォーム工学の将来展望」と題して発表があった。市橋先生は長く外交官として在外

公館に勤められ、主に経済畑を歩まれた。ICUSが主導する防災分野での社会技術の実装は、科学技術外交の側面からも非常に重要であり、他の分野でも本所が主導的に実施するべきだと静かに熱く語られた。浦研出身の巻先生は、本所で最も若い教員である。海洋生物資源探査を中心に、分野横断的な取り組みを精力的に行っている。その研究姿勢が発表にも現れ、荒波によく揉まれた感じのする本所の教員らしい発表

内容が印象的だった。今回は冷たいビールで熱を冷ます季節が過ぎ去ったためか、参加者が幾分少なかったのが唯一残念な点であった。これからの寒い季節、熱い議論とコミュニケーションで乗り切るのが生研流であろう。生研サロンのハブ機能を高めるためにも、本所の構成員全体の元気を少しずつ寄せ合ってください。

（企画運営室員 竹内 渉）



高校生のための金曜特別講座

駒場Iキャンパス18号館ホールにて開催の2010年度冬学期「高校生のための金曜特別講座」（教養学部主催）において、12月17日（金）に基礎系部門梅野准教授が「材料の強度と物性の原子レベルシミュレーション」という題目で講演を行った。

ものづくりにおいて材料の強度評価は欠かせない。連続体近似に基づく材料強度学・破壊力学がマクロな現象に対して成功を収めてきたが、近年はサブミクロン～ナノオーダーの材料強度問題を対象として原子モデルによる取り扱いが精力的に行われている。また材料の電

導性や磁性など様々な物性と変形との相互作用も重要となっている。本講演では、マクロな材料強度学の初歩から原子モデルを用いたミクロな材料強度および変形のシミュレーション、

さらに量子力学計算によるマルチフィジックス解析まで事例を交えて紹介し、現在も工学的・工業的に重要な分野である材料強度物性学について概説した。本プログラムは主に高校生を対象としているが一般の社会人の参加者も多かった。また講演は全国の高校40校にもインターネット配信された。参加者からは、最先端の研究について分かりやすく解説され興味が持てた、若者へ向けたメッセージがよかった、などの声が寄せられ好評であった。

今年度本所からの担当教員

岡野達雄、梅野宜崇、

新野俊樹、岡部 徹

（基礎系部門 梅野 宜崇）



VISITS

外国人研究者講演会

11月26日(金) 司会：教授 藤井 輝夫

Prof. Michel LANNOO
Advisor of the President for Nanoscience and Nanotechnology,
National Center for Scientific Research (CNRS), France (Research
Vice-President, Paul Cezanne Aix-Marseille University, France)
STRATEGIC APPROACH TO NANOSCIENCE AND
NANOTECHNOLOGY DEVELOPED BY CNRS

11月29日(月) 司会：教授 川口 健一

李英民 氏
教授,重慶大学(College of Civil Engineering, Chongqing University),
中華民国
DAMAGE OF BUILDING STRUCTURES DURING WENCHUAN
EARTHQUAKE

12月2日(木) 司会：助教 横井 喜充

Dr. Melvyn L. GOLDSTEIN
Chief of Geospace Physics Laboratory, NASA Goddard Space
Flight Center (GSFC), USA
VIEWING THE SOLAR WIND AS A LABORATORY FOR THE
STUDY OF MAGNETOFLUID TURBULENCE

1月20日(木) 司会：客員教授 市橋 康吉

Prof. DEMBEREL Sodnomsanbuu
Scientific Secretary, Mongolian Academy of Sciences (MAS),
Research Center of Astronomy & Geophysics (RCAG), Mongol
INTRODUCTION TO RCAG AND DEVELOPMENT OF
SEISMOLOGY IN MONGOLIA

1月20日(木) 司会：客員教授 市橋 康吉

Dr. ULZIBAT Munkhуu
Head of Seismological Department, Seismological Department,
Research Center of Astronomy & Geophysics, Mongolian Academy of
Sciences, Mongol
RECENT SEISMIC ACTIVITY AROUND ULAANBAATAR AREA,
THE CAPITAL OF MONGOLIA

1月20日(木) 司会：客員教授 市橋 康吉

Dr. Enebish NINJARAV
Associate professor of Geotechnical Engineering, Vice Director,
School of Civil Engineering and Architecture, Mongolian University
of Science and Technology (MUST), Mongol
GEOTECHNICAL PROPERTIES OF MONGOLIAN SOILS

外国人協力研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
RAHMANN, Heike Insa	ドイツ連邦共和国 メルボルン大学 講師	2010.12. 1~2011.11.30	人間・社会系部門 太田研究室
JONAS, Marieluise	ドイツ連邦共和国 ロイヤルメルボルン工科大学 講師	2010.12. 1~2011.11.30	人間・社会系部門 太田研究室

博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
釜田 康裕	日本	2011. 1. 1~2011.12.31	機械・生体系部門 帯川研究室

PERSONNEL

人事異動

生産技術研究所 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.11.30	GUMARD DENIS YVES ALIX	辞職	—	准教授 情報・エレクトロニク ス系部門
22.12.31	町田 学	辞職	Assistant Professor University of Michigan	助教 基礎系部門
22.12.31	釜田 康裕	辞職	—	助教 機械・生体系部門

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.12. 1	吉江 尚子	昇任	教授 附属サステイナブル材 料国際研究センター	准教授 物質・環境系部門

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 1. 1	日高 邦彦	兼務	教授 附属エネルギー工学連 携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 1. 1	原 祥太郎	兼務	特任講師	特任講師 大学院工学系研究科

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.11.15	BOSSEBOEUF ALAIN	契約期間 滿了退職	常任研究員研究部長 フランス国立科学研究 センター (CNRS)	特任教授 (短時間)
22.11.15	松永 行子	辞職	特任講師	特任助教
22.11.16	松永 行子	採用	特任講師	特任助教
22.11.30	趙 毅	辞職	—	特任助教
22.12.31	小野晋太郎	辞職	特任助教 (短時間)	特任助教

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.11. 6	上村 典子	育児休業 開始	特任研究員	—
22.11.30	西村 康幸	辞職	CEIソフトウェア・ ジャパン株式会社	特任研究員
22.11.30	北川 隆	辞職	専任研究員 中央大学	特任研究員
22.12. 1	五條 理保	採用	特任研究員	派遣流動研究員 財団法人医療機器セン ター

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.12.1	佐藤 暁子	採用	特任研究員	学術支援専門職員 (短時間)
22.12.1	商 海川	採用	特任研究員	ニューサウスウェールズ 大学工学研究科コンピュータ 科学工学専攻博士課程
23.1.1	片山 玲	採用	特任研究員	Visiting Researcher Microsoft Research Asia

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23.1.1	石井 珠緒	採用	学術支援専門職員	派遣職員

(学術支援職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23.1.1	伊藤真以子	採用	学術支援職員	事務補佐員

生産技術研究所 事務系

(学内異動(出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.12.1	鬼澤 真樹	昇任	係長 施設部施設企画課 <障害者集中雇用担当>	主任 総務課総務・広報チーム

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.12.31	加藤 洋一	辞職	—	専門職員 経理課最先端研究開発支 援室総務支援チーム 総務支援チームリーダー

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.11.30	井原 章之	辞職	—	特任助教

地球観測データ統合連携研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
22.12.1	生駒 栄司	任命	特任准教授	特任助教
22.12.1	王 磊	任命	特任准教授	特任助教
22.12.31	田村 徹	辞職	アソシエイト スイス 再保険会社	特任助教

■昇任のご挨拶

附属サステイナブル材料国際研究センター
教授

吉江 尚子



12月1日付で教授に昇任いたしました。2003年に生研に着任して以来、人にも物にも恵まれ、以前から行ってきたバイオベース・生分解性高分子材料に関する研究に加え、動的結合の制御による機能性高分子材料の開発や、高分子の非平衡構造凍結によるナノスケール秩序構造発現など、新たな取り組みを軌道に乗せることができました。分野横断的なつながりを大切にする生研の中で、良い意味で刺激を与える側になるよう努力していきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

■着任のご挨拶

機械・生体系部門
特任講師

松永 行子



この度、11月16日付で特任講師に着任いたしました。私は、これまで細胞から組織・臓器を作製する組織工学・再生医療分野の研究に取り組んで参りました。近年、再生医療技術が新しい医療手法として実践されるようになり、今後更なる実用化が期待されております。その中で、今まで以上に医学と工学との異分野融合を図り、先進医療に貢献する研究をより一層推進していきたいと思っております。皆様にはご教示、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願いいたします。

AWARDS

■受賞 教員

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属マイクロナノメカトロニクス国際研究センター	教授 年吉 洋 民間等共同研究員 諫本 圭史	最優秀論文賞 電気学会センサ・マイクロマシン部門	高速MEMSスキャナを用いた次世代SS-OCT用波長走査型光源	2010.10.15
附属エネルギー工学連携研究センター	特任研究員 池上 貴志	環境システム論文奨励賞 (社)土木学会	気候条件の違いによる下水熱利用地域冷暖房システム導入効果の解析	2010.10.24
情報・エレクトロニクス系部門 (桜井研究室)	助教 更田 裕司	嵩賞 大阪大学	製造ばらつきと環境変動を許容するサブスレッショルド回路設計に関する研究	2010.11.4

AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属海中工学国際研究センター	准教授 北澤 大輔	日本海洋工学会JAMSTEC中西賞 日本海洋工学会	「養殖事業の包括的環境影響評価」の他、多数の関連論文を関係諸会議にて発表。養殖事業に対する新しい視点からの環境影響評価法を示した。	2010.11. 9
附属戦略情報融合国際研究センター 国立情報学研究所	教授 佐藤 洋一 助教 岡部 孝弘 大学院生 Shuai Han 准教授 佐藤いまり	The Sang Uk Lee Award for the Best Student Paper The Tenth Asian Conference on Computer Vision	Fast spectral reflectance recovery using DLP projector	2010.11.11
附属戦略情報融合国際研究センター	教授 佐藤 洋一 助教 岡部 孝弘 派遣研究員 島野美保子 元大学院生 松井 壮介	情報処理学会創立50周年記念論文賞 (社)情報処理学会	Image enhancement of low-light scenes with near-infrared flash images	2010.11.18
機械・生体系部門	教授 都井 裕	Best Paper Award of International Conference on Computer Science and Applications 2010 IAENG(International Association of Engineers)	Finite Element Analysis of Adaptive Trusses with Shape Memory Alloy Members	2010.11.22
情報・エレクトロニクス系部門 東海大学 弘前大学	准教授 根本 利弘 教授 曾根 光男 准教授 丹波 澄雄	電気科学技術奨励賞 (財)電気科学技術奨励会	気象衛星NOAA画像の精密幾何補正に有効なGCPマッチング技術の開発と移植	2010.11.24
附属先進モビリティ研究センター 新領域創成科学研究科	准教授 橋本 秀紀 大学院生 中村 壮亮 胡間 遼 助教 鯉坂 志門 居村 岳広	Best Paper Award The 7 th International Conference on Ubiquitous Robots and Ambient Intelligence(URAI 2010)	Pinpoint Wireless Power Transformation System Using Reflection Coefficient in Magnetic Resonance Coupling	2010.11.26
情報・エレクトロニクス系部門 University of Cambridge	教授 合原 一幸 Dr Hugh Robinson	Daiwa Adrian Prize 2010 Daiwa Anglo-Japanese Foundation	Nonlinear dynamics of cortical neurons and gamma oscillations-from cell to network models	2010.12. 2
附属エネルギー工学連携研究センター 弘前大学 広島工業大学 (株)III 産業技術総合研究所	教授 堤 敦司 助教 伏見 千尋 特任研究員 石束 真典 大学院生 中村 有 准教授 官 国清 准教授 池田 雅弘 主任研究員 須田 俊之 研究員 松田 聡 主任研究員 幡野 博之 グループ長 鈴木 善三	第16回流動化・粒子プロセッシングシンポジウム賞(研究部門) 化学工学会粒子・流体プロセス部会流動層分科会	Flow behaviors in a high solid flux circulating fluidized bed composed of a riser,a downer and a bubbling fluidized bed	2010.12. 6
附属先進モビリティ研究センター 鹿児島大学	教授 池内 克史 特任助教 小野晋太郎 元大学院生 松久 亮太 教授 川崎 洋	第9回ITSシンポジウム2010 ベストポスター賞 一学術部門ー 特定非営利活動法人 ITS Japan	車載カメラ映像の時空間マッチングを利用した自転車位置推定	2010.12.11
人間・社会系部門	教授 岸 利治 助教 安 台浩	Outstanding papers of the year Journal of Advanced Concrete Technology	Crack Self-healing Behavior of Cementitious Composites Incorporating Various Mineral Admixtures	2010.12.25

■受賞 学生

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属都市基盤安全工学国際研究センター 桑野研究室	大学院生 佐藤 真理	第45回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞 (社)地盤工学会	土砂流出に伴う空洞形成模型実験におけるひずみ分布の解析	2010.9.24
附属都市基盤安全工学国際研究センター 桑野研究室	大学院生 佐藤 真理	Excellent Young Researcher Award 都市基盤安全工学国際研究センター	Fundamental study of permeability change around buried structures in sandy ground	2010.10.13-15
附属海中工学国際研究センター 北澤研究室	大学院生 Md. Nazrul Islam	Techno-Ocean 2010 A New Era of the Ocean Student Poster Award Techno-Ocean 2010	Key Challenges and Effectiveness of Marine Regime Creation	2010.10.15
情報・エレクトロニクス系部門 合原研究室	大学院生 木脇 太一	2009年度未踏IT人材発掘・育成事業スーパークリエイター (独)情報処理推進機構	Emacs的なドローソフトの開発	2010.10.28
人間・社会系部門 古関研究室	大学院生 田實 渉	土木学会平成22年度全国大会第65回 年次学術講演会優秀講演者 (社)土木学会	締固めた砂礫盛土材料の微小変形特性の静的・動的測定	2010.11.10

AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属先進モビリティ研究センター 池内研究室	大学院生 韓 亜由美 教授 須田 義大 池内 克史 特任助教 小野晋太郎 民間等共同研究員	第9回ITSシンポジウム2010 ベストポスター賞 一技術部門ー 特定非営利活動法人 ITS Japan	視知覚情報に基づく道路シークエンスデザインによる走行制御効果の検証	2010.12.11
情報学環	教授 玉木 真 佐々木正人			

■ 受賞のことば

附属都市基盤安全工学国際研究センター
桑野研究室 修士課程2年

佐藤 真理

第45回地盤工学研究発表会 優秀論文
発表者賞

(社)地盤工学会

「土砂流出に伴う空洞形成モデル実験に
おけるひずみ分布の解析」



Excellent Young Researcher Award

都市基盤安全工学国際研究センター

「Fundamental study of permeability change around buried
structures in sandy ground」

今回二つの異なる賞を受賞することになりました。現在構造物近傍での土砂流出と空洞形成メカニズムについて研究しており、受賞した二つの発表もそれに関するものです。片方が空洞周辺のひずみ分布を画像解析により明らかにした研究であり、もう片方が構造物近傍の局所的なゆるみを透水試験により検討した研究です。今回の受賞に際してご指導ご助言いただいた桑野先生、技術職員の宮下さんにこの場を借りてお礼申し上げます。今後も研究に励みたいと思います。

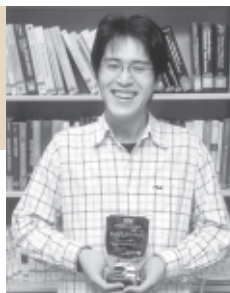
情報・エレクトロニクス系部門
合原研究室 修士課程2年

木脇 太一

2009年度未踏IT人材発掘・育成事業
スーパークリエイター

(独)情報処理推進機構

「Emacs的なドローソフトの開発」



IPA (独立行政法人情報処理推進機構) が主催する未踏ユースの開発プロジェクトで、スーパークリエイターの認定を受けました。

このプロジェクトではLispというプログラミング言語によって自由に操作と拡張ができるドローソフトを開発しました。これを用いると、ルーチンワークや複雑な作画などの効率を高めることができ、またソフトウェアの機能拡張も自由に行えます。

最後になりますが、本開発を監督して下さった早稲田大学の筧捷彦先生ならびに、見守って下さった合原一幸先生に感謝致します。

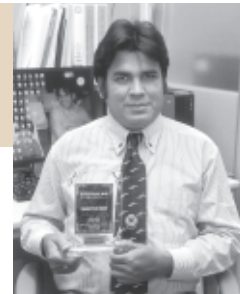
附属海中工学国際研究センター
北澤研究室 博士課程1年

Md. Nazrul Islam

Techno-Ocean 2010 A New Era of the
Ocean Student Poster Award

Techno-Ocean 2010

「Key Challenges and Effectiveness
of Marine Regime Creation」



This research seeks to overview of the historical background and the basic elements of the marine convention, protocol and then proceeds to discuss the challenges and effectiveness of regime creation of the convention as a whole. Nearly all developed nations have signed to the convention and protocol, but participation from the developing world is severely lacking. The main challenges lie in the lack of a level playing field between industrialized countries and developing countries.

All praises and gratitude are to my PhD supervisor Prof. Daisuke Kitazawa who has inspired, pleasant supervising and work with me. I would like to show my gratefulness to the all staff and members of Marine Ecosystem Engineering Laboratory.

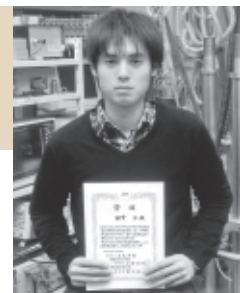
人間・社会系部門 古関研究室
修士課程2年

田實 渉

土木学会平成22年度全国大会
第65回年次学術講演会優秀講演者

(社)土木学会

「締固めた砂礫盛土材料の微小変形
特性の静的・動的測定」



本研究は古くから行われている盛土の締固めを、耐震性向上などの要求性能の向上に対応させるため、締固め度と強度特性、微小変形特性の関係について検討したものです。ここでの成果を、将来的には現場での新たな締固めの基準作りに活かしていければと考えております。

今回、このような賞をいただき大変うれしく思うとともに、指導教員である古関先生、実験について一から教えて頂いた佐藤剛司さんをはじめご指導いただきました研究室の方々に深く感謝致します。

AWARDS

附属先進モビリティ研究センター 池内研究室
博士課程2年

韓 亜由美

教授 須田義大、池内克史
特任助教 小野晋太郎
民間等共同研究員 玉木 真
情報学環 教授 佐々木正人



第9回ITSシンポジウム2010

ベストポスター賞 一技術部門ー 特定非営利活動法人 ITS Japan

「視覚情報にもとづく道路シーケンスデザインによる走行制御効果の検証」

ITSシンポジウム2010よりベストポスター賞（技術部門）をいただきました。一昨年に続き2度目の受賞です。受賞論文は、「視覚情報に基づく道路シーケンスデザインによる走行制御効果の検証」です。本論文は、2008年に高速道路本線で試行的に実施され速度制御効果を上げた著者発案の路面表示「オプティカルドット」の視覚効果について、ドライビングシミュレータを使った被験者実験により検証し、その内容と成果を報告したものです。池内研はじめ関係者の皆様に深く感謝いたします。

CAMPUS TOUR 総長賞を受賞して

レゴブロックを使って作品制作を行っています。一つ一つのパーツは単純な形をしていますが、何万ものピースを組み合わせることで自在に形を作ることができます。

普段は趣味として自分の作りたいものを作っていますが、最近ではイベントやテレビ番組向けの作品を作ることも多く、作品規模も徐々に大きくなってきました。作品制作以外の活動としては、レゴブロックを教材とした中高生向けの講義や、海外でのワークショップなどの教育活動も行っています。

また、私が大学1年のときに大学内で有志を募って「東大レゴ部」を創設し、グループとしての活動も行っています。東大レゴ部としては、五月祭での展示活動を中心に行っていますが、学外での展示やイベントにおいても精力的に

活動を行っています。東大レゴ部としての初作品である「レゴ安田講堂」(写真)は本郷キャンパス・コミュニケーションセンターにて常設展示されております。

これらの一連の活動を通じて、世代、国境、業種を越えた人間関係に恵まれ、人とのつながりの大切さをあらためて実感しております。これからも人とのつながりを大切にしながら、レゴを通じて少しでも多くの人と関わり、作品制作に携わっていききたいと思います。

関連ウェブサイト：http://www.geocities.jp/jun_brick/

(2011年現在)

(サステイナブル材料国際研究センター
岡部研究室 三井 淳平)



PRESS RELEASE

■生研関連新聞記事

以下の各紙に掲載された生産技術研究所の研究成果に関する記事について紹介しています。

詳細は、総務・広報チームにお問い合わせください。

・読売、朝日、毎日、日経、産経、日刊工業、日経産業

なお、その他の新聞に掲載されたものを本欄に記載することを希望される場合は、総務・広報チームへご相談ください。

最新記事	
●東大など スマートリファレンス デバイスを試作 アースなしで高度通信 〔1/17 化学工業日報 5面〕	【滝口清昭研究室】
・東大、マウス実験 立体状の神経組織 脳に移植し組織結合 脳疾患治療に応用期待 〔12/13 日本経済新聞 14面〕	【竹内昌治研究室】
●フォトリソ人工原子レーザー 3次元結晶内で発振 東大 光集積回路の光源に 〔12/17 化学工業日報 5面、日刊工業新聞 25面、 12/20 日本経済新聞 11面、日刊工業新聞 17面、化学工業日報 4面〕	【荒川泰彦研究室】

掲載項目について『●』で始まる項目は記者会見、『・』で始まる項目は研究に関する掲載記事です。



Inside Intel

(インターン体験記)

情報・エレクトロニクス系部門

桜井研究室 博士課程2年 池内 克之

私は米国のOregon州 Hillsboro にありますパソコンのマイクロプロセッサで有名なIntel社の研究所に10月から2ヶ月半滞在しました。HillsboroはSeattleの300km南のPortlandの郊外にあり、車で一時間も走れば海にも山にも行ける自然豊かな街です。ここはIntelの拠点の中でも最大のもので、先日、次世代LSIの試作工場の建設が発表された場所でもあります。キャンパスは空港の滑走路の文字通り隣にあり、中学校の地理で「半導体産業→空港」と学んだことを実感しました。

私がお世話になったのはIntel Labsの中のCircuits Research Lab, High Performance Groupです。研究テーマは(再構成可能な回路の接続回路の低消費電力化)についてで、研究スタイル、研究規模とも生研の研究室と非常に近く、基本的に自分の研究は自分一人で設計から測定まで行っており、違和感無く研究が行えました。時間的な縛りは緩く、一応就業時間は8時-5時という規定はあるものの、ほとんどの人は9時に出社し、5時半に帰宅しており



した。会議も家から電話会議で参加しても良く自由でした。

大学と大きく異なる点は2点ありました。1点目は製品に研究成果を組み込むことが非常に重視されることです。製品化の見込みがなければどんなに面白くても意味のない研究とみなされますし、逆に新規性が多少無くても、製品で使用している回路よりも良ければ良いと判断されます。滞在中、自分の研究成果を連日のように商品開発部に売り込む電話をかけているところを見ましたし、実際にグループ内の研究成果も多くのものが製品に採用されており、驚きました。

2点目は研究の進捗会議が無く、基本的に直属の上司と一対一で1、2週間に一度個人面談形式で行い、グループ内の情報共有は基本的にメールか立ち話で済ませることで、日本の研究室でよくある週一回の進捗会議と比べ、情報共有に要する時間が短縮でき、上司と短時間で深い議論ができました。

今回は米国企業の研究・マネジメントスタイルを垣間見ることができる貴重な経験になりました。LSI回路の研究で世界最高峰の研究所にも決して引けを取らない生研の環境のすばらしさをあらためて実感致しました。

• PROMENADE •

Inspiring experience: Shizuoka

When I was asked to write about my experience in Japan I remembered the days when I arrived in Japan. I came here knowing nothing about this unique and wonderful country except the trade marks - Toyota, Honda and Sony. Since the last three years in Japan, I have experienced an overwhelming amount of culture and traditions. As for now, I already started to feel Tokyo as my second home town.

When I first came to Japan, all I saw were tall buildings and bright lights everywhere for the first few days. Now as I write, my whole three years stay in Japan is filled with numerous unexpected memories; most of these memories are the culture experiences. Although most of the inspiring memories are from the cultural trips to various prefectures of Japan, however a unique experience that inspired me the most was a trip to Shizuoka. Unique in a sense that it provided opportunity to feel a mixed environment of modern age infrastructures along with wonderfully preserved natural beauty.

As soon as I exited the Shizuoka station I realized how different it is in Tokyo. Jammed pack trains with people is normally a seen in rush hours of a day in Tokyo. At the first sight Shizuoka city clearly distinguished itself with its calmness and tranquility of its atmosphere.

The natural landscape of mountains rising above blue waters of the sea was a marvelous illustration of

its uttering beauty. Attractive waterfalls, fields of green tea on the mountain slopes and gardens of strawberry were unique experiences for my life time. Spectacular view of Mt. Fuji at various locations in Shizuoka is a wonderful attractiveness. Inconceivable contrast of high tech society yet their profound affection to nature were fascinating for me. A meal with delicious "Sushi", "Unagi" and "Yakisoba" proved the incomparable reputation for the sea foods of Shizuoka prefecture.

Equally fascinating is the way in which the landscape of the Shizuoka city is being preserved. With the big AbeRiver flowing from the north, such cities commonly face numerous land conservation problems. However from scientific point of view Shizuoka city sets a standard in the way the city is being managed.

As expected, the people of Shizuoka were extraordinarily polite. *Ojisans* and *Obasans* were walking around with smiling faces. Although Japanese people are outstanding in their politeness, extra composure seemed to be a quality of the people of Shizuoka.

The unprecedented experience of a unique cultural city with wonderful natural beauty reminded me of the words of my parents after their two weeks stay in Japan. "You are living in a paradise".

(基礎系部門 小長井研究室

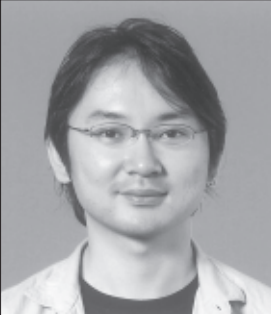
博士課程2年 Ahsan Sattar (パキスタン))



Shiraito-no-taki Fall, Fujinomiya city



Sunpukoen, Shizuoka city
From my trip to Shizuoka



FRONTIER

ゆらぎが作る生き物らしさ ～数理で挑む生命の秘密～

情報・エレクトロニクス系部門 講師 小林 徹也

生き物はどこまで遺伝子で決まっているのだろうか？パーソナルゲノム解読や細菌ゲノムの人工合成、人工多能性幹細胞（iPS細胞）の作成など、ゲノムを中心とした生命科学関連技術の応用が昨今頻繁にメディアにも取り上げられるので、考えたことがある人もいないだろうか。

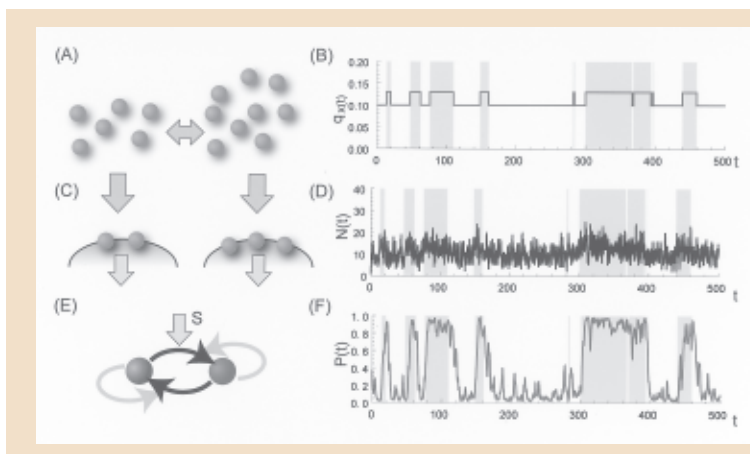
実は我々も含むすべての生き物の構成要素である細胞は、遺伝子のプログラム通りに動く微小ロボットではない。たとえ全く同じ遺伝子セットを持つ細胞集団でも、個々の細胞の振る舞いは大きな多様性や個別性を持ちゆらいでいることが、この10年で実験的に明らかになっている。この「ゆらぎ」は、遺伝子のように具体的なモノ（物質）があるわけではなく、モノの組み合わせの中から現れてくるコト（振る舞い）である。我々は、このとらえどころのない細胞の「ゆらぎ」に、数学を介して論理的な実態を与え研究をしている。

生き物は「ゆらぎ」を巧みに活用している。例えばある種のバクテリアや癌細胞ではこの「ゆらぎ」によって集団に多様性が生じるおかげで、抗生物質などの危機的な条件下でも全滅の確率が抑えられている。「ゆらぎ」による細胞の適応戦略を理解することは、人間にとって害のある細胞の影響を抑制するためには不可欠なのである。

また「ゆらぎ」の存在は、生命システムが人工システム

とは違った設計論理で構築されていることも示唆する。コンピューターに代表される人工システムは、毎回同じように振舞う信頼性の高い部品を組み合わせで出来ている。そしてこの高い信頼性を得るために、かなりのエネルギーを消費している。これに対し、我々の体はとてもいい加減に見えるゆらぐ細胞を組み合わせで出来ている。しかし協調して動くべき我々の体の細胞が勝手に振舞ったら、もちろん全体としてのまとまりはできない。未だわからないのは、どうやっていい加減な部品を組み合わせで、システム全体としての安定性・恒常性を作り出しているのか？というその論理である。その論理を数学的な形で書き下すことが我々の一つのゴールである。

ここで数学にこだわるのは理由がある。数学はシステムを構成するモノには縛られず、純粋にコトとしての特性を抽出することができる。つまり、生物の使っている論理を人工物の設計にも応用することができるようになるのである。生物から学ぶ新たなシステム設計の論理は、曖昧な部品を使って安定なシステムを創り出す新たなヒントになるだろう。またそんなシステムは、プログラム通りにしか動かない現在の人工システムとは違った、融通の効くシステムにもつながるのかもしれない。



数学を用いて予測された「ゆらぎ」に安定な細胞内の反応。細胞へのシグナルが(A)のように2つの状態を時間的に移り変わる場合(例えば(B))、「ゆらぎ」の為に細胞が受け取るシグナル(C)は(D)の様にとても乱雑なものになってしまう。理論的に予測された(E)という細胞内反応は、(F)の様に(D)から元の(B)を復元し、「ゆらぎ」の中でも安定に機能する。このような構造と相同の反応が最近実験的にも見つかってきている。

■編集後記■

今号の生研ニュースから変わった点があるのですが、お気づきでしょうか？それは表紙の撮影カメラマンです。1990年の創刊時は岡宮さん、その後は倉科さん、そして今回から重田さんに代わりました。これまで30年以上にわたり、写真・ビデオ撮影のプロとして本所に貢献して下さいました倉科さんが今年3月にご退

職されます。倉科さんが本所に就職された当時は6名いらっしゃった映像技術室のスタッフも、今年4月からは重田さんと特任専門職員の2名になる予定です。研究成果などの撮影にお悩みの方、是非、映像技術室に撮影を依頼してプロの技をご堪能下さい。(高宮 真)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所
☎(03)5452-6017 内線56017、56018
■編集スタッフ
小倉 賢・清田 隆・金 範
高宮 真・太田 浩史・三井 伸子
E-mail: iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp
生研ホームページ
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>